25
660

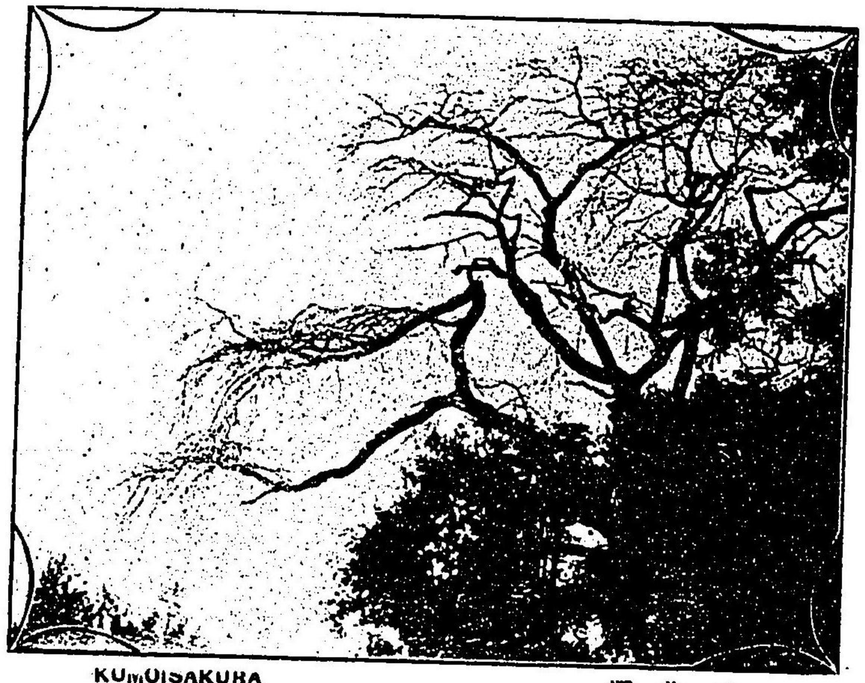
025711-000-7

25-660

よしの名所

楠田 良三／刊

M41
ADC-3245



KUMOISAKURA

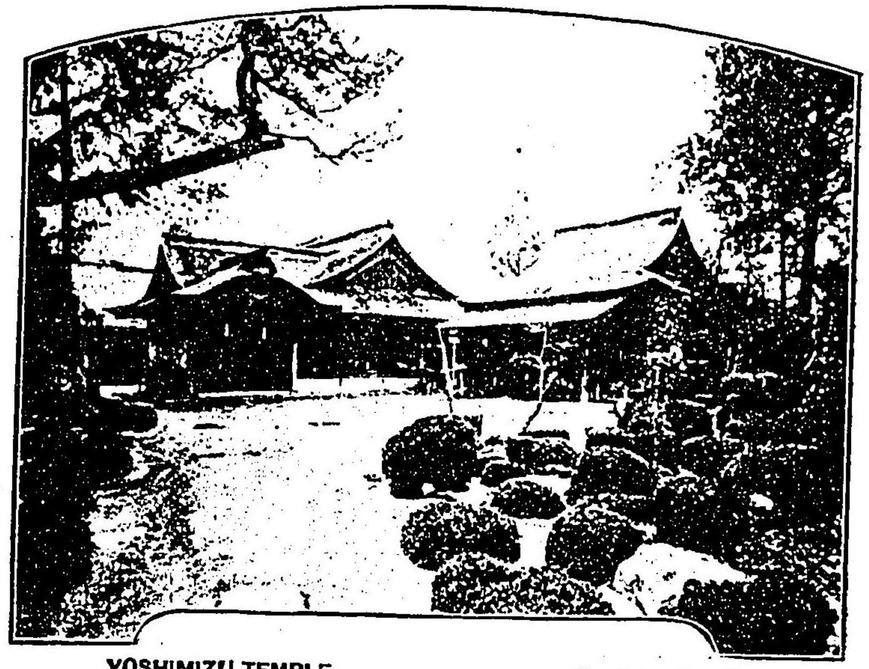
雲井櫻

YOSHINO TEMPLE

官幣大社吉野宮

YOSHINO OHASHI

吉野山大橋

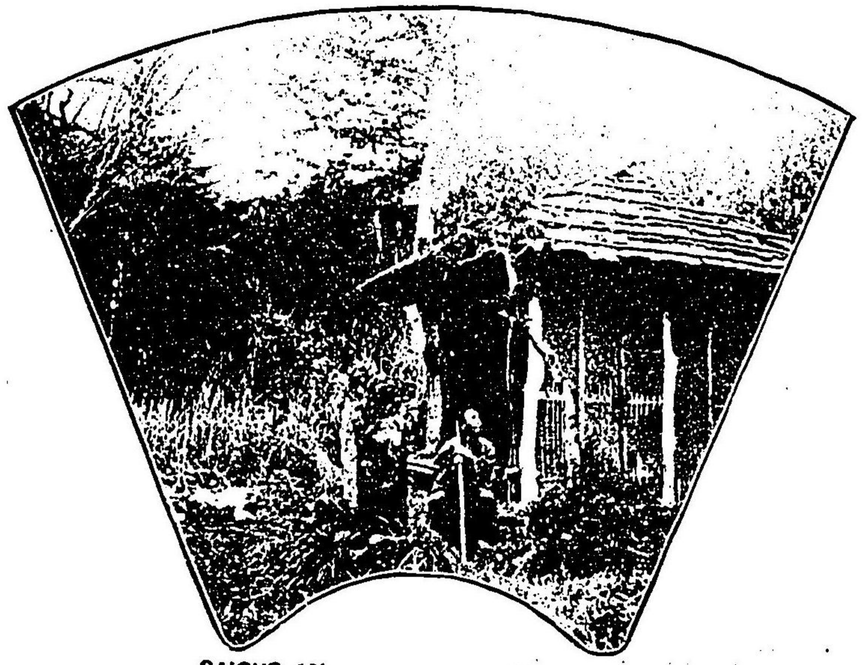


YOSHIMIZU TEMPLE

吉水神社

NAKA-NO-SENBON

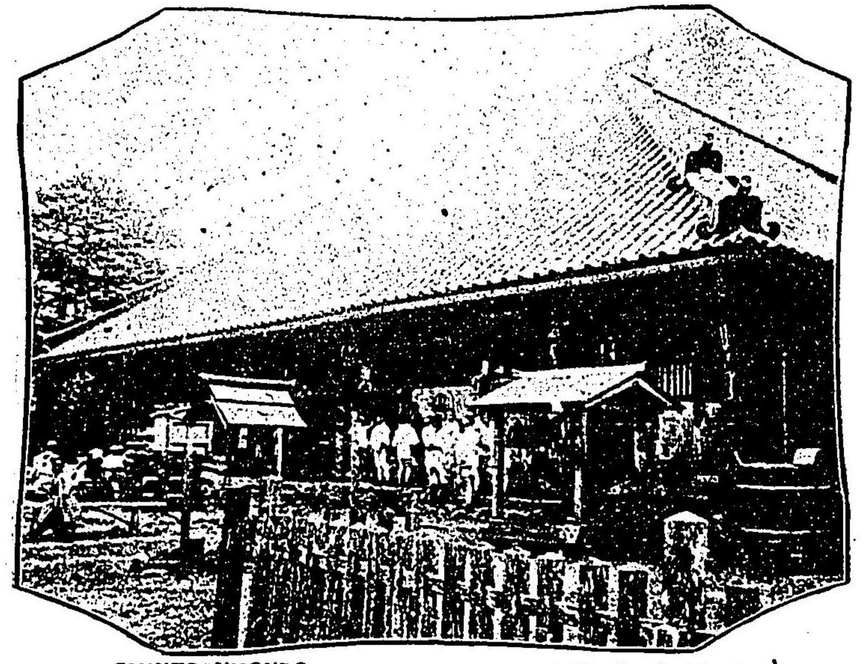
櫻本千の中



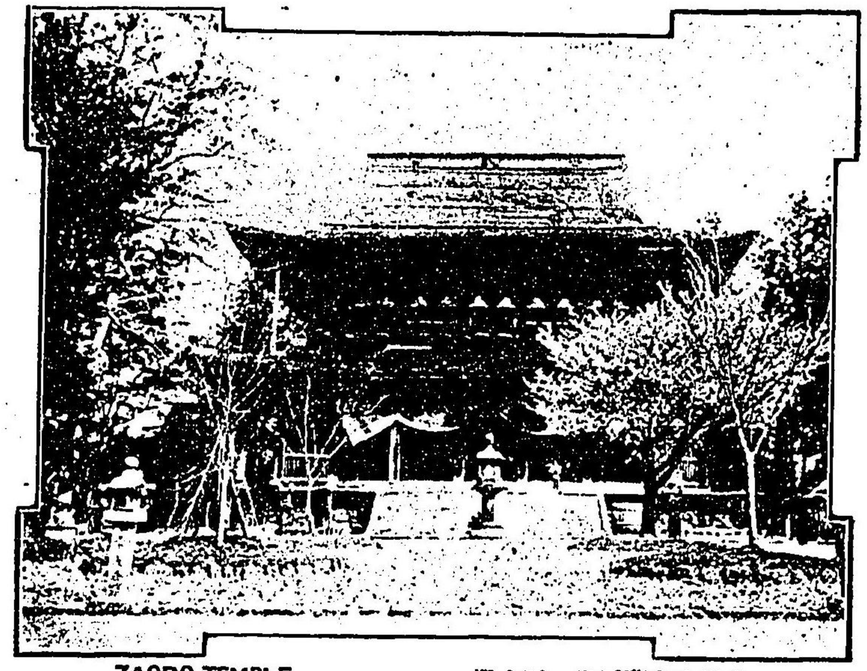
SAIGYO-AN

西行庵

NIYOIRINDO　　如意輪堂



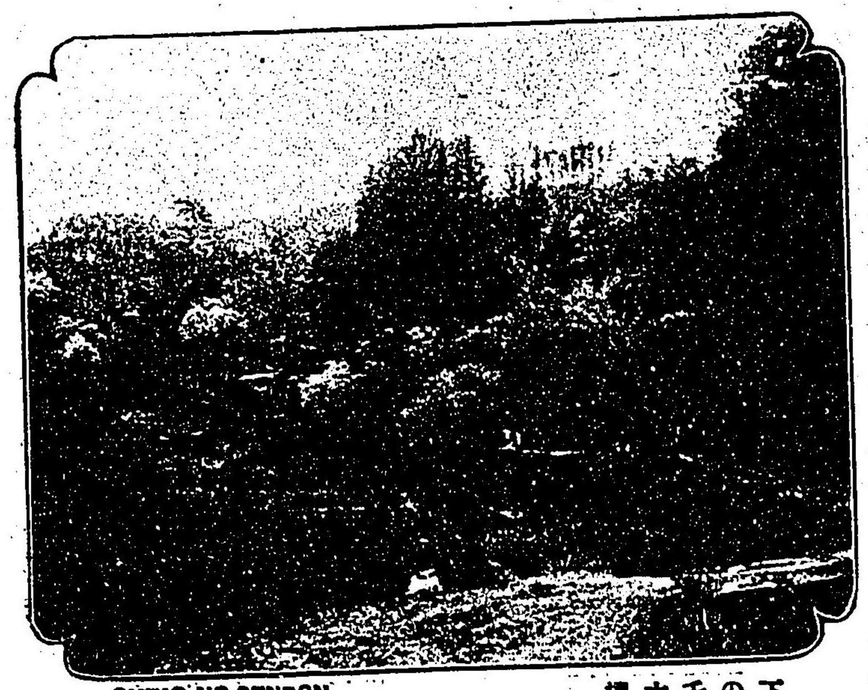
OMINESANHONDO　　大峯山本堂



ZAODO TEMPLE　　櫻本四　堂王藏寺山峯金

MIZUWAKE TEMPLE　　社　神　分　水

上の千本櫻　KAMI-NO-SENBON

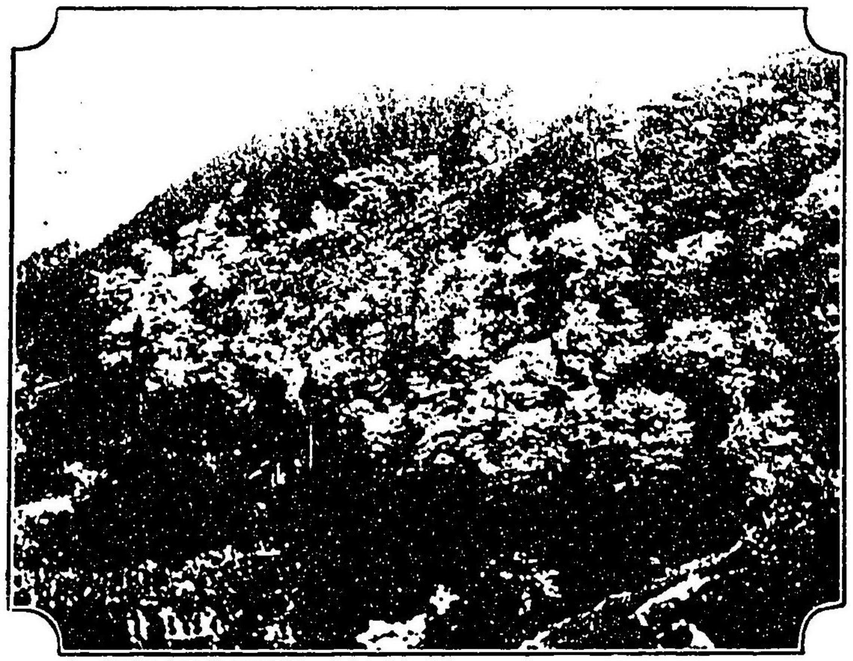


下の千本櫻　SHIMO-NO-SENBON

吉野山は世に櫻花を以て聞ゆ、畿内に無類なるのみならず歴史上著名の古蹟たり、凡そ大和國の市都より此山に到らんとする者通常四路に精ち即ち第一は多武峯より細道を越え上市に出る者にして道路頗る嶮悪、第二は高取山の東を越ゆる者にして所謂等が峠越えなる者、第三は八木街道より吉野へ來る者にして之を壺原峠越えと云ふ、第四は戸毛驛より車坂を越え下淵を經て六田に到る者にして第五は吉野の停車場より東阪を極て六田に到るものにして道路最も平易人力車を通ずべし、是等の路其孰れに據るも吉野山に登るには必ず六田若しくは上市よりせざる可からず然れども先づ六田より登り歸路を上市に取るを尋常の順路とし六田より直ちに阪路に攀づれば毎町石標を立て行程を記す、一の阪は村端の阪路にして其邊より既に櫻樹あり阪を登ること數町にして路稍〻廣く山脊を沿ひて行くこと凡そ二十餘町兩側に老櫻樹多し世に長峰の櫻と云へる是なり此間路の右傍に南朝の忠臣村上義光の碑（墓は山に在り）及び豊臣秀吉觀花の舊跡等を存す、斯くて三十町目に至れば千本の茶屋あり

25-660

吉野山は雅櫻花を以て邦内に無雙なるのみならず歴史上著名の古蹟たり、凡そ大和國の中部より此山に到らんとする者通常四路に藉る即ち第一は多武峯より細道を越え上市に出る者にして道路頗る嶮惡、第二は高取山の東を越ゆる者にして所謂芋が嶺越えなる者、第三は八木街道より吉野へ來る者にして之を蘆原峠越えと云ふ、第四は戸毛驛より車坂を越え下淵を經て六田に到る者にして第五は吉野の停車場より東阪を徑て六田に到るものにして道路最も平易人力車を通ずべし、是等の路其孰れに據るも吉野山に登るには必ず六田若しくは上市よりせざる可からず然れども先づ六田より登り歸路を上市に取るを尋常の順路とし六田より直ちに阪路に攀づれば毎町石標を立て行程を記す　一の阪は村端の阪路にして其邊より既に櫻樹あり阪を登ること數町にして路稍や廣く山脊を沿ふて行くこと凡そ二十餘町兩側に老櫻樹多し世に長峰の櫻と云へる是なり此間路の右傍に南朝の忠臣村上義光の碑（墓は山に在り）及び豐臣秀吉觀花の舊跡等を存す、斯くて三十町目に至れば千本の茶屋あり



KAMI-NO-SENBON　　上の千本櫻

SHIMO-NO-SENBON　　下の千本櫻

茶屋の邊より山谷を俯仰すれば滿目悉く櫻樹殆んど他樹を交へず乃ち名けて一目千本と云ふ、上市より櫻の渡を渉り飯貝より登る者は四手掛神社を右側に拜して漸く登り七曲阪に至れば櫻花最も多く阪の半途より山谷の花を眺矚するを日本が花と名く蓋し日本無雙の意なるべし而して三十二町目に至り兩路合して一となり三十三町目に一の橋あり其欄干に豊臣秀頼再修の文字を銘す橋を過ぎて幾ばくならず黒門に入る是れ吉野町の總門にして是より民家櫓を並べ旅店を業とするあり土地の名産を鬻ぐあり南北凡そ十餘町に連る、門内隱れ松と稱するは花時翠色を埋沒せらるゝに據り其名を得、關屋の櫻は古へ其地に關塞ありしより其稱あり一株に限れるには非らざるが如し、銅の華表は往時町の中央小高き處に在りしが先年暴風の爲めに吹倒せられ、藤尾阪は俗に藤井阪と呼ぶ文治元年義經の妾靜、山僧の爲めに捕獲せられたる所なり、漸く登りて藏王堂、東南院、勝手社、竹林院等を右傍に見左側に吉水院、如意輪寺等を遠望し喜藏院、櫻本坊等を過ぐれば町端に天皇橋あり此間も亦櫻

樹兩側に多く途上仰いて山腹を望めば所謂奥の千本なる者雪を欺き雲を欺く、橋を過ぎて猶ほ歩すること少許乃ち岐路あり左すれば櫻木の宮、宮瀧等に至るべく、右すれば子守社、金峰神社、苔清水等に至るべし、右路を取りて又登れば路漸く窄くして且つ嶮しく夢遠觀音堂、禪定寺、大將軍社等の趾あり義經の臣佐藤忠信が君に代つて防戰せし所は大將軍社の上方にして俗に花櫓と云ひ右傍の谷を中院谷と云ふ山僧横川覺範を討ちたるは即ち其谷なり、花櫓の上に義經の潛伏せし處あり辰返しと名け其隱匿したる岩を山伏隱れ岩と稱す此近傍に於て道路の左右に在る櫻樹を布引櫻と唱へ、山上に仰望するものを雲井櫻と云ひ谷間に俯瞰する者を瀧櫻と云ふ雲井櫻瀧櫻共に子守社の下に在る者あり、又登りて子守社を過ぎ金峰神社を歴て奥の院の茶屋に至れば吉野町勝手社を距ること凡そ五十町、此に及んで再び二條の岐路あり右する者は山上ケ嶽の路にして左すれば瀧廻りの路なり乃ち山崖の逕路に沿ふこと四五町にして苔清水に達し又行くこと一町許にして西行庵に到る、吉野に遊ぶ者大

概西行庵を以て最終とし歩を吉野町に返へさゞるなし、若し夫れ右に叙述したる途上及び其他の名蹟の如きは更に要を摘んで左に掲載すべし看者之を對照せば略ぼ同山の案内を知るを得ん

四

吉野山名所

日本は櫻を以て鳴り櫻は吉野で鳴る吉野といへば櫻を聯想するのみならず歴史上の大關係あり往古交通不便の時も文人、墨客、慷慨家、志士、其他商工業者の雲集景慕する者陸續たりしに、今や交通至便參拜者當時に百千倍せり爰に順路名勝記を述へて利便に資す

◎吉野山は　又名、金御嶽、御金嶽、金峰山、國軸山と云ふ此山は大和吉野郡の北部に位し詞林采葉抄曰「神武天皇日向の國より御船にて難波につき河内を徑て生駒山を越玉ひしに長髓彦之を防ぎしかば葛城山を越て吉野に入ますと云々」日本書記曰「神武天皇吉野に至玉ふ時に光ありて井中より出る人あり帝之を問て曰汝は何人ぞ對て曰臣は是國神なり(名を井光と云ふ)」之即ち吉野首部の始祖なりとぞ仝書に曰　應神天皇十九年吉野宮に行幸あり　天武天皇入らせられ　雄略天皇二年幸す　持統天皇は毎年行幸し給へりと云ふ　文武天皇も臨幸あり　詞林采葉抄曰　元正天皇養老七年五月吉野の離宮に行幸し玉ふとあり　聖武天皇も神龜元年三月行幸し給ふよし」

◎吉野　和名抄曰興之乃、日本書記及萬葉集に吉野、又芳野に作る三吉野とは吉野郡の郷

名上、中、下、三郷を合して之を云ふとぞ總て二十一代集の歌數三百七十餘首猶家々の集物語の類詩歌俳等數ふるに遑あらず

◎吉野山櫻濫觴　舊記曰　天智天皇十年十月皇太子大海人避大友皇子而入芳山居日雄寺十一月三日薄暮奏神樂於勝手祠前親取琴而彈歌其御製之國詩忽雲中有天女髣髴現于祠後之山飜袖而舞恍合其曲太子獨能視之從者不能視也其外夢山中有櫻花嬌妍如春三月翌朝捲御簾見前山有一樹櫻花艶然而開汝其判之角乘肅然對曰夫櫻花者花中之王也　殿下適有此感是　殿下春來發光榮於天下之兆也臣又謹按彼勝手神是木花開耶姫命也此神萬花之主宰而特愛櫻花故其名曰木花木花者即櫻花也且夫昨暮之女是此神感　殿下之琴歌而出現也其飜袖而舞者是豫知　殿下之登極而歡喜也　太子動身大喜曰善矣太子又語角乘曰往昔履中帝之遊宴也櫻花落于御盞彼時仲冬也故奇異之羣臣皆奉賀焉因遂造稚櫻宮今我亦仲冬也豈可不奇而喜哉我若他日得志而主于四海則滿櫻山植樹以報彼神之示現又爲汝造立一寺名以櫻花以賞汝判夢之的中汝且待之角乘唯々而退是年十二月三日　天皇崩明年果大友皇子敗亡而　太子登極是爲　天武天皇白鳳二年二月　天皇勅植櫻樹若干株於山中是賞勝手神也是年九月又勅就櫻之夢後所見之櫻樹

一下創營寺名曰櫻本坊以賜角乘之子角仁乃今之櫻本坊是也其後貴賤男女或祈誓芳山神祠者每其願成就輙必栽櫻以報神德而年々蕃滋遂至山頭山尾幽谷之曲無有隙地矣弘仁年中山靈託一童女曰我是曼櫻神也自今以後苟截山櫻者我必罰之從是山人畏稱神太而益務培植若有摘一花折一枝者神罰立來於是更揭斬伐禁止之榜以戒來遊之客當今芳山樵者雖其朽枝葉不撫而爲薪者是是其遺風也云々

◎吉野川　（仙覺抄曰）舊名遊副川、水源吉野郡大臺原より發ると同郡高見山より發ると合流して吉野、宇智の両郡を徑て紀州に落ち海に入る

◎六田里　吉郡川の両岸にあり六田淀又（ムッダ）とも云ふ名所なり古歌多しこの川に三ケ所の渡あり此渡を柳渡と云ふ元亨釋書曰　此六田の渡は聖寶僧正始めて設くる所なりと柳樹をかけて渡りしを以て此名あり、上市の渡を櫻渡と云ふ昔櫻樹ありしが故に是を名づく、瀨上渡を梅渡と云ふ是も昔梅樹ありしを以て名く

◎一の阪　六田より吉野山及び大峰山上に登る路なり是より五丁程屈曲たる阪路にして一月千本櫻に至るまで路傍石標を立て麓より町數を示せり吉野宮迄十四町藏王堂迄三十町餘有り此間櫻樹多し

◎長峰「吉野八景の一、長峰彩霞」一の阪より一目千本櫻迄を云ふ此間道傍の左右櫻樹連綿として恰も花洞の如く又左右の山谷ともに櫻樹多し俯すれば吉野川の清流は透迤として眼下に長蛇の形を成し仰げば西には金剛山、東は高見山、南に大峰山、北には鷹取、龍門等の高嶺を瞰望して風景絶佳なり歌塚、吉野宮、峰藥師堂址、村上彦四郎墓等此峰にあり

◎歌塚　吉野宮の前一町ばかりの處にありて一老松の下に六尺餘の天然石を樹て左の俳句を刻す吉野川及び上市の市街は一眸の中に集まり秀光明媚にして宛たる一幅の畫圖なり

月雪の流れてやまず吉野川　一片亭　可翠

◎官幣大社吉野宮　六田より十四町餘り登りて西側にあり（元丈六山勝福寺一の藏王堂ありし所なり明治八年頃是れを廢す）明治二十二年六月二十八日神殿をこゝに創立し官幣大社吉野宮と稱す明治三十三年額殿を新築し又其東方十間ばかり隔りたる小丘に吉野郡川上村朝拜組の献納に係る立妃大典紀念碑及一双の銅鶴を建設し次に偉を添へたり此紀念牌の撰は藤澤南岳、書は伊藤明瑞にして鶴の高は一丈二尺あり

本殿祭神　後醍醐天皇

攝社　御影神社　祭神　贈從二位藤原資朝　贈從三位藤原俊基

攝社　船岡神社　祭神　贈正四位兒島範長　贈從三位兒島高德

攝社　瀧櫻神社　祭神　贈正三位櫻山茲俊　贈正四位得能通綱

寶物は　後醍醐天皇御宸筆其外南朝歷代忠臣の遺物等數多あり

◎長峰藥師堂址　昔三河國鳳來寺よりうつせしものなり今は廢して礎石だになく唯名の遺れり

◎南朝忠臣村上彦四郎義光碑　碑は藥師堂址の側にあり其墓は碑石の上の高所にあり五輪の塔を立つ」太平記曰元弘三年大塔宮護良親王吉野城に籠らせ玉へば賊將二階堂道蘊に攻られければ親王は軍に敗し玉ふ時に義光親王の鎧を賜り敵を欺き討死云々

忠烈之碑

元弘之亂大塔王出據吉野東師圍之七日不克東人宵潛入金峰昧旦三覆齋改鼓譟而進王

援甲出身戰被七矢染血及履未遑拔矢還入藏王堂立飲于庭中小寺相模斬一人桂首劍鋒歌且舞邨上君諱義光棄敵走回謂王曰彼熾我潛臣願賜王鎧衣代王而死王曰死則同所君厲言固諫進解王衣登樓呼曰神孫帝子今已自裁若等蠢々死亦不久志以爲法說甲投下刎賜擲銜鋒而俛東師大驚解圍爭獲王逸君子義隆見君臨死與俱君曰叱若衛面君義隆乃從王鬪殺數人而創走投竹中屠稱腹斃王適高野遂殲渠魁嗚呼方王事多難君之忠烈百世之後夫婦之恩尙猶誦之景文每及之未嘗不髮上乃樹貞石于此以勒大節辭曰諫則屈誨則信得仁哉若人由義哉若人

天明三年冬十月　　高取內藤景文子武立

◎松山亭址　豐臣太閤登山記錄に曰　文祿三申午年二月廿七日登山廿八日　門跡公家諸大名吉水院へ出仕廿九日御歌會晦日御茶會三月朔日茲にて御花見あり其節建設せし亭なり御歌會の歌を豐公吉野百首と稱し刊行す

◎嵐山　路の右側に在る山を云ふ京部西山の櫻樹は　龜山天皇此山より移し玉ひしとかや諸書に見えたり

◎一目千本櫻　長峰より一目に見る所櫻樹最も多し俗に下の千本と云ふ

前度尋春花已開。今來暖雪照人顏。十年纔補平生缺。春母重遊芳野山。

山陽頼襄

◎御野立址　明治二十三年四日廿一日　皇后宮御登山の時一目千本の絕景を賞せられ御休憩ありし所なり

明治二十三年の春よしのへ行啓あらせられんとする時よみて奉りける

みよし野々千もとの櫻のこりなくえみ綻ろひて君をまつらん

御歌所長藤原正風

◎芭蕉歌塚　一目千本の道傍にあり石を立て俳句を刻す

吉野にてさくら見せうそ檜木笠　　は　せ　を

◎日本花　七曲阪の上より峰々谷々の櫻を一面に見渡すを云ふ

◎幣阪及幣掛神社　七曲の麓に老杉有る所なり

吉野紀行　明神をおがみて

芳野山花のゆふしくかけまくもかしこき神の心をそしる　雅章

◎七曲　「吉野八景の一、七曲曉櫻」多武峰へ行く路なり和州巡覽記曰飯貝の方より登

るを脇道と云ふ阪路屈曲七回にして攻が辻に達す其間滿山櫻樹にして卽ち一目千本の中にある道なり

◎追分又攻か辻　飯貝へ行くと六田へ行くとの別れ所なり南北朝の時賊軍茲より攻上り大に戰ひし所となん此辻より櫻渡及六田柳渡へ三十丁有り（櫻渡より四丁餘り川上に妹背山あり名所なり）

◎御船山　又三舟山、船岡山ともいふ東方に見ゆる山を云ふ名所なり古歌多し

◎大橋　又一の橋とも云ふ擬寶珠に銘あり慶長九年甲辰十一月豐臣秀頼御再修云々

◎隱松　道の東側にあり吉野勝景圖に笈立松と記す里老云櫻花滿開には花に隱るゝ故に名付くと

◎關屋櫻　大橋より黑門迄にある櫻を云ふ昔し茲に關を構へし所ならん

豐臣花見記

吉野山誰とむるとはなけれとも今宵も花のかけにやどらん　豐臣秀吉

◎黑門　吉野町に入る總門なり是より人家つゞく

◎吉野町　黑門より水分神社まで人家續きて大凡四百餘戸あり多くは崖腹連り三階造りにして眺望佳き旅舍多し四時遊客の間斷なく實に一都會をなせり、茲にて需ぐ物産多し

櫻菓子　▲櫻花漬　▲櫻珈琲　▲花籠　▲吉野紙　▲葛　▲漆　▲折敷　▲香魚　▲火打　▲螺貝　▲松茸　▲杉檜苗及種子　▲檜笠

等なり其外靈藥だらに助は眼病及腹痛に妙なり

◎銅華表　總門を入る一丁計りの處にあり高二丈五尺柱周一丈一尺餘あり　聖武天皇の御宇奈良大佛鑄造の餘銅を以て造ると云ひ傳ふ一說には　醍醐天皇昌泰元年建られしものとも云ふ額面なる「發心門の三大字は御宸筆とも又弘法大師の筆とも云ふ明治二十一年七月二十三日暴風の爲に倒れしが同二十八年四月再建し以て舊狀に復す

又吉野山より大峰山上に至る迄、發心、修行、等覺、妙覺の四門あり此銅華表は卽ち其一の發心門なり修行門は俗に二の鳥居と云ふ金峰神社にあり等覺門の額は小野道風の筆にして妙覺門の額は弘法大師の筆なり昔は大峰山上にありしが今は藏王堂の寶庫に納む

◎藤尾阪　俗に藤井阪と云ふ東鑑に曰　文治元年十一月十七日源義經の愛妾、靜、藤尾阪を登り藏王堂に來りしを吉野の衆徒みとがめこゝにて執へけると云ふ此阪は人家より西邊に有しとか

みよしのゝ花の白雲ふみ分て入にし人の跡そ戀しき　靜　子

◎花見塚　東方に見ゆる山を云ふ文祿年中豊臣太閤觀花せし址なりしと（此所に吉野山一目に見る處あり）

◎仁王門　又大門とも云ふ藏王堂の山門にして康正年間の創立なり桁行八間餘梁行五間餘あり祀所の東、密迹力士は湛慶の作西、金剛力士は運慶の作と云ひ傳ふ、各長一丈六尺餘あり風鐸の銘に康正二年丙午九月廿日とあり今一個を存す藏王堂の寶庫に納む

◎藏王堂　「吉野八景の一、金峰杜鵑」金峰山寺の本堂なり天平年間　聖武天皇御宇行基菩薩金剛藏王權現の像を自造し佛殿をも創立せられて安置す「芳野新詠曰五十神祠十寺、都來輪奐大伽藍と」「又元享釋書には承暦三年十一月金峯山の塔供養云々と記せり盛衰記曰定朝が藏王堂に調進せし狗犬殿の上に啖合て大床より落たりと」元弘

年間大塔宮護良親王兵を吉野に擧ぐ時に陣所となりしに賊將二階堂道蘊攻奉りて藏王堂幷に廻廊等皆兵燹に罹る延元年間再建すと」大平記曰貞和五年正月十四日師泰師直寄來る所に帝は天の川の奥賀名生の邊へ落させ玉ひしかばさらば燒拂へとて皇后、卿相雲客の宿所へ火をかけし程に二丈五尺の銅鳥居金剛力士の二階の門、北野天神、七十二間の廻廊三十八所幷に藏王堂、一時に煙となりしと記せり」昔は樓門大塔、講堂、金堂、觀音堂、七十二間の廻廊、其外四十一區の坊舍有しが元弘及正平の兵燹に罹りて殘らず燒失せり今の堂宇は康正年間の建立にして又天正廿年大修繕を加ふ十八間四面高さ十一丈二尺柱の數は七十二本あり堂内に神代の杉の柱あり長三丈五尺周り一丈三尺あり又躑躅の木の柱あり長三丈一尺周り八尺あり俗に立樹なりといふは誤なり（此木は吉野郡經尼村より奉納の者なり故に天明年間の頃より正月一日に燈明の火を點ると吉野山舊記にあり今は廢す）祀る所の本尊は今剛藏王大權現木像にして長二丈六尺本尊釋迦如來なり脇士二丈二尺にして千手觀音なり脇士二丈二尺にして彌勒菩薩なり行基菩薩の作なりと吉野山舊記にあり此藏王と山上の藏王と奥の院の藏王と世之を金峰三所の權現と云ふ寶物は寶庫に納めれり拜見せんと望む人は事務所に願ふべし

特別保護建造物　本堂

重寶は　後醍醐天皇御宸筆の金光明最勝王經、裏面に宇治十帖之内六帖と記せり○光明皇后の御筆の大般若經○千手觀音大悲尊の畫像（兆殿司筆）○金峰山秘密傳記三卷延元二年　後醍醐天皇叡覽○大峯山上藏王堂再興記錄四卷○後水尾天皇より吉野山小松院住僧本食快元へ賜し御綸旨壹通○其外南朝遺物青磁の大花瓶等にして其他寶物錄に記しあり

國寶　鍍金經箱大峯山上發掘　三箇

◎觀音堂　四本櫻の東側にあり建立年間詳かならず本尊十一面觀音自在尊立像にして長七尺いと古し

◎經藏　觀音の南にあり大藏經を入るゝ所なり

◎花供懺法碑　經藏南にあり明治二十七年此に建つ

◎紫銅燈籠　藏王堂の正面にあり六角形にして高一丈餘わり扉には文字ありしが維新の際に取除く文明三年辛七月吉日の銘あり

◎鐘樓堂　藏王堂の西側にあり構造年間詳かならず

◎四本櫻　藏王堂の前にあり元弘三年癸酉閏二月朔日吉野陷る　大塔宮護良親王茲に帷幕を張り最後と思召て御酒筵を開き劍舞を奏し村上彦四郎義光親王の甲冑を賜はりし所なりと諸書に載す

◎威德天神社　四本櫻の西側にあり「元亨釋書曰天慶四年八月朔日椿谷椿山寺住僧日藏上人示現依而菅公の靈を祀る云々

◎大塔址　威德天神社の南にあり九輪臺一破今に存す

◎南門址　村上義光戰死せし處

◎寶城寺　金峰山寺の本坊なり西之尾即ち藏王堂の西にあり明治八年廢寺となる延元々年より　後醍醐天皇南遷したまひ先づ吉水院を以て行在所とせられ後寶城寺を行宮と定められ諸儀式もこゝにて行はれしと云ふ、當寺は金輪王寺と稱し又金輪寺御所又生木（くゝ）御所とも云ふ吉野山學頭主寺なりしが慶長十九年甲寅霜月德川家康大阪在陣の節吉野山は要害の地なればとて南光坊天海僧正に仰せて舊御所金輪王寺を修繕せしめて寶城寺と改稱し金輪寺王を日光山に遷して宮門跡の稱號を附け天海僧正を金峯山寺學頭中興の第一世とす因て吉野山は日光山の支配地となりて維新の改革に

至る迄は事皆學頭の與る所となれり今は礎だになく明治七年に神佛判別の令あり伽藍僧舍は神社の名稱となりしが明治十九年に至りて吉野山及大峰山上共に復舊す寶物等も數多ありしが今は吉水神社に藏せり當時京都所司代及天海僧正より下したる制札の文に曰く「禁制和州吉野山　一諸軍勢甲乙人濫妨狼藉之事　一武家牢人寄宿之事一修理領並寺領當納所致難澁事　右條々堅被停止訖若違犯之族於有之者速可被處嚴科之旨依仰知如件

慶長十九年霜月十九日　　板倉伊賀守判　　南海坊僧正判

後醍醐天皇御製

都たにさひしかりしを雲はれぬ吉野のおくの五月雨の空

◎耿天山　藏王堂より南小高き所に在り昔耿天明神の社ありしを以て今に此名あり明治二十八年故吉野宇智郡長玉置高良の碑を此山に建つ山の東は昔朝ヶ原と云ひし所なり維新前までは朝ヶ原神社もありしが今は其跡を止めず

◎東南院　開基日圓上人は學識備の高德にして求法の爲入唐し佛敎の溫奧を究め唐の皇帝の歸依を得幾多經卷及法器數十點を下賜せられ歸朝後上人有緣の社寺へ渡來の

經卷及法器を納められ今金峯山寺什寶中の唐鈴は上人が渡來せる物品の其の一也當院は上人の創立に係り累代非凡の僧輩出して代々近衞家の祈願所として公家の紋章を拜領し明治維新は前代の住職公家の猶子となる金峰山寺々中有數の名刹なり

◎吉水神社　「吉野八景の一、吉水庭月」南朝の時の行宮にして元は吉水院と云明治八年に吉水神社と改稱す　後醍醐天皇及大楠公を奉祀す吉野山舊記曰　天武天皇白鳳年中役小角大峰山修行の時創立す其後聖寶僧正及文治年中源義經辨慶等茲に籠る故に義經追討狀辨慶思案の間等あり「大日本史及南山史曰　後醍醐天皇延元元年十二月廿一日吉野に潛幸し玉ふ時當寺住職宗信兵を率ゐて奉迎し茲を以て行宮とす云々」後金輪王寺に遷り玉ひぬ金輪王寺にありし御物は今は當社に藏せり「太平記曰帝床を御枕とし玉ひ

花にねてよしやよしのゝ吉水の枕の下に石はしるおと

吉野拾遺に曰　帝吉野に移らせ玉ひける又の年の春睦月の末つかた吉水の法印に仰ける

御製に

みよしの丶山の山守言問ん今いく日ありて花は咲おん
花さかり頃はいつとも白雪のゐるをしるべにみよしの丶山　宗信

勅答申けるとなん「櫻雲記曰與國二年北畠源大納言親房神皇正統記六卷を作り常陸國より献す云々又同書に　後村上帝吉野を帝都とし玉ふと雖も行宮殿閣なく月卿雲客微少にして昇進除目殆ど斷絶せんとす是に於て源親房常陸小田城に居て聰原抄二卷を作り吉野へ奉ると云々」吉野山舊記曰　後村上　後龜山の二帝も茲にて卽位し玉ふよし又文祿三年豐太閤吉野山花見の節茲に留まりしと」因に云義經の寓せしも南朝の行宮となし玉ひしも今の建物にて未だ遺り替へずと云甚古し又寶物等數多あり其目錄を、藏山圖錄と云ふ

國寶、願文紙本墨書（傳に後醍醐天皇宸筆）　壹卷
同　色々威腹卷　壹領

富岡鐵齋

溪聲到處興帶圖。探到芳山感有餘。偶遇老僧談往事。始知蘭若是皇居。

◎花温泉　吉水神社より東三丁ばかり下にあり炭酸泉にして四時共に浴客滿つ

◎太子殿　燈籠の辻より西側にある舊き建物なり本尊聖德太子長六尺木製にして自作と云ひ傳ふ此寺は元櫻本坊ありしが今は西本願寺の說敎所となれり

◎御影山　山口神社の前なる山をいふ以前は松櫻樹ありて佐抛明神の社もありしが今は只其名殘りあるのみ

吉野記に（さなき明神の山を御影山と云ふは天人の影うつりしよりいふとかたり侍へしがば）
さなきたにさなきの神の御影山うつらふ花に風もこそふけ　雅章

◎勝手神社　元勝手明神と云ふ明治八年今の名に改稱す

祭神　忍穗耳命、　大山祇命、　久々廼智命
祭神　本花咲耶姫命、　苔虫命、　葉野姫命

昔し神功皇后三韓征伐の時勝手神と云ひしとかや「巡覽記曰此神前にて源義經妾靜女法樂の舞を奏し其裝束及義經鎧遺物等寶庫にありしが正保年間の火炎に燒失したり云々」

太平記曰　後村上天皇賀名生の邊に落させ玉ふ折に勝手の宮の前を過させ玉ふ時中さる

たのむかひなきにつけても誓ひてし勝手の神の名こそをしけれ、

◎袖振山　古名那良志山　山口神社の後の山を云ふ名所なり古歌多し「本朝月令曰天武天皇此處にて琴を彈じ玉ひし時神女出て應じ羽衣の袖を五度飜して舞けりと故に袖振山と云ふ蓋し五節の舞の始めとぞ

◎村上藏人義隆墓　山口神社の前を右へ行くこと五町ばかりの山腹にあり「大日本史曰義光の男なり　大塔宮敗北し高野山へ落ち玉ふ時敵兵迫來りければ義隆一人防ぎ戰ひ宮を救ひ奉りて茲に討死す年十八歳なりと

村上義隆之墓誌　翠亭竺全

吉野山有村上君之墓二焉其在嶺藥師者爲父君彥四郎其在南溪山腹者爲郎君藏人徵之諸書則確乎中古誤立父君碑於南漆過者或疑焉勢人松井延基偶一謁歎曰何者致此鹵莽二君之神必不安矣吾當改製之因謀諸山司伐蓁芥平嶮崔嵬樹一碑題其面曰藏人村上君義隆之墓石偉工良大勝奮覩足以發藏人氏光輝矣舊碑移之嶺藥師而使各得其所焉夫當大塔王嬰守之時賊兵肉薄城將陷二君死以脫　王於虎口　王之他日能鑒滅醜魁安靖宸襟者皆出於二君之勳績也其忠勇大節載存竹帛然　天師一蹤　王赤蒐于謐毒政權

再歸將家者五百餘年矣二君窀城遂將湮晦不亦悲哉方今　王政復舊百僚賢明漸有繼絶興廢之舉異時此墓亦應有全表之議願延基爲之嘱矢餘深感之慨然遂書　時明治三年庚午秋八月也

◎後醍醐天皇塔尾陵　山口神社の前を東へ八丁ばかりの所にあり即ち如意輪堂の上にあり延元三年八月九日より御不豫次第に重らせ玉ひ終に御劒を按して八月十六日丑の刻に崩御寶算五十一とぞ申き藏王堂よりは巽の方に當れる林の奥に圓岳高く築て北面に葬り奉り仝上十一月五日　後醍醐天皇と諡し奉りしと諸書に載す「櫻雲記曰正中五年の春新禄賢門院　先帝の昔を慕ひ塔尾の陵に參る是より先藏王堂其外功舍兵火に回祿す然れ共花は昔に變らず哀に覺えて一房消息の内に入れ宗良親王に送るとて

みよしのはみしにもあらす荒にけりあたなる花は猶殘れとも

◎世泰親王墓　御陵の側にあり　後龜山天皇第一の皇子なり

◎塔尾山如意輪寺　「吉野八景の一、塔尾暮鐘」當寺は日藏上人の開基にて本尊は如意輪觀音の靈像あり又國寶の一藏王權現の靈像あり長二尺八寸にして木製傳へて役行

者の作と云ふ厨子の扉には巨勢金岡の筆なりとて吉野八大神の畫有り又扉の上に延元帝の御宸筆賛七言律詩あり此寺に小楠公の辭世を鐫めし有名の塔扉其他南朝忠臣の遺物等あり其目錄を什寶錄と云ふ本寺は久しく荒敗にまかせたりしが近年に至りて方丈及本堂寶藏等に大修繕を加へ御靈殿幷茶所等を新築し表門の石階は悉皆改造し舊觀を復す

養鵬徹定

天意一從揚國華。忠臣義士簇加霞。芳山千樹白櫻色。看停乾坤正氣花。

◎小楠公髻塚碑　仝上にあり當國節齋森田益の撰文あり南木誌及楠公記曰正平二丁亥年十二月二十七日楠正行其族黨百四十三人　後醍醐天皇御陵に拜訣し鏃を以て如意輪塔の扉に

かへらじとかねておもへは梓弓なき數に入る名をそとゝむる

と一首の辭世を錄し髻を截り進て四條畷に出陣し翌年正月五日高師直等と大に戰ひ之に死す年二十三或は二十五と云ふ

荒井鳴門

楠公永訣先皇墓。鬼籬上名淚幾行。留得龕扉絕命語。忠肝義膽斷人。

腸楠左衛門尉髻塚碑

正平三年正月　東駕在芳野賊將高師直大舉來寇楠左衛門尉與其族黨百四十三人詣行宮陛辭畢拜訣　後醍醐帝陵入如意輪寺各截髻題姓名於壁然後進戰不克皆死之今茲乙丑之秋益自備中歸鄉將登談山遂遊芳山會津田正臣建石欲以表左衛門尉髻塚來請文益曰餘且遊二山子姑待之已而登談山謁藤原大織冠廟親模宏敞殿宇壯麗使人起敬及登芳山首問其所謂髻處在藝艸寒烟中過者或不知也於是益祇徊不忍去潸然泣下曰左衛門尉與大織冠皆　王朝藎臣也而大織冠斃大怒於一擊回天日於將墜位極人臣子孫蔓衍廟食百世左衛門尉則賊討不克以身殉難南風不競宗族殆盡今欲求其遺跡而不可遂得嗚呼何其幸不幸異也已益拭淚以爲其幸不幸雖異其功未嘗不同也夫大織冠回天之績偉矣然比之左衛門尉父子之大節彪炳與日月幷懸存綱常於無窮者未知其孰愈故曰其幸不幸雖異其功未嘗不同也益既歸正臣復來促乃舉前言告之且曰方今夷狄猖獗九重霄肝士効力　國家之秋也事成則爲大織冠廟食百世不成則爲左衛門尉死節垂名於竹帛豈非大丈夫平日之至願乎正臣踵然起曰是可以表左衛門尉髻塚矣遂書以與之正臣

字仲相稱監物世仕世紀藩楠中將十八世之裔云
慶應紀元冬十月　大和廣士森田益撰　伊勢三井高敏書　東京廣瑩鶴鐫

◎藤本鐵石招魂碑　仝上にあり鐵石傳曰諱は眞金字は某鐵石と號し津之助と稱す備前人片山某の第二子なり出て藤本氏を嗣ぎ池田伊豫守の家臣となる壯歳致仕して四方に遊び大阪及び伏水京都に寄寓す好みて韜畧を講じ又書畫を善くす文久三年癸亥の秋九月二十五日大和國吉野郡鷲家村にて戰死す年四十八

◎中の千本櫻　後醍醐天皇御陵の麓にありて又明治二十二年の頃櫻樹數千を植ゆ

谷如意

路入芳山夕陽裏。春雲暖雪白屑々。千株萬樹花如海。薫滿南朝天子陵。

年々や花にかくるゝよしの山　永機

◎井光明神舊跡　出口神社の南三丁計りにあり里老云ふ古木ありて社及び古き井在る所ありと

◎喜藏院　當院は本山先達にして聖護院門跡毎年入峰の節宿す古色云熊澤了介茲に假寓せしと」蕃山行狀記曰貞享丁卯四年冬十月上表して禁錮せらる元祿辛未四年秋八

月十七日殞于古河壽七十有三儒禮を以て其地に葬ると」年譜曰寛文七未の年さはる事ありて吉野の山深く住侍る頃

この春は吉のゝ山の山守となりてこそ知れ花心を　熊澤伯繼

◎櫻本坊　大峰山登山先達にして三寶院門跡入峰の時は茲に宿す抑も當寺は五臺山五臺寺と號す元仝山市場町にありしが明治八年頃こゝに移す此寺は元密乘院と云ふ仝八年神佛判別の際山内の佛像を茲に集む故に諸佛堂の名あり名作佛像多し

◎竹林院　椿谷椿山寺とも云ふ「元亨釋書曰抑當寺は延喜十六年二月三好清行の弟吉野に入り髮を削りて僧となり道賢と云ひ茲に修業して日後藏王人となる卽當寺の中興開基なりしと」又御嶽山人とも云ひ大峰山笙窟に籠りしとぞ

庭園は細川玄旨の好みと云ふ傳ふ泉水築山風流を極め櫻は最も有名なるもの多し

◎天王橋　小山神社　社は橋の右側にあり此前左の路は　宮瀧、櫻本神社、大瀧　丹生川上神社への通路あり

◎布引櫻及猿引阪　此右の阪より辰の尾迄を云巡覽記曰此邊道の左右にある櫻を布引櫻と云ふ其櫻布を敷きたるが如し故に此名あり鹽釜櫻は橋の邊にあり

吉野紀行　雅章

布引も錦とみへて芳野山名にこへにけり花の一しほ

◎上の千本櫻　小山神社より東南の山隅にある櫻林を云ふ象谷へ行く道なり

◎御幸芝及雨師神社　「吉野八景の一、雨師新緑」元は獏の觀音堂ありしが明治八年頃に廢す吉野拾遺曰　延元帝五月雨の頃茲に行幸し玉ひて

こゝは尙丹生の社に程近しいのらは露よ五月雨の空

◎横川法師覺範首塚　道の右字中院谷にあり義經記曰　佐藤忠信と戰ひ茲に討死す」

吉野山勝景圖曰忠信が防ぎ矢射ける花矢倉といふは此谷あり

◎瀧櫻　辰の尾の上の谷間にあり

吉野紀行

いかなれば水なき空の瀧櫻花の波たつみよしのゝ山　雅章

◎雲井櫻　獅子尾阪の上にあり名花あり

新葉和歌集　延元帝の御製に

こゝにても雲井の櫻咲にけゝ只かりそめのやどゝおもへと

◎世尊寺址　鷲尾山と號す獅子尾阪の上にあり明治八年頃に廢す本尊釋迦如來長六尺八寸木製にして脇士は阿難、過葉なり各長四尺餘有り、抑も此本尊は放光佛と稱し日本にては佛像彫刻の始なりと云ふ「日本書紀曰　欽明天皇十四年夏五月和泉國泉郡茅渟海中に有梵音震響若雷聲光彩晃曜たることなし日色　天皇心に異之遣溝邊直入海求訪す是月溝邊直入海果して見樟木浮海玲瓏遂に取而献ず　天皇命畫工造佛像三軀今吉野寺放光樟像也とあり其木像は今藏王堂の寶庫に納めり按ずるに當時未だ佛工有らず故に畫工に造らしめたるものか其作素朴にして古雅後世の金箔嚴飾の類と大に其趣を異にす以て上代の風物を相見するに足るべし

茲に古鐘のり世に吉野三郎大鐘と云銘に金峰山寺洪鐘保延六年庚申十二月二日播磨守平朝臣忠盛旋入云々の文字あり

◎吉野水分神社　世に子守明神と云「延喜式曰　祭神は右天萬栲幡千々姫命、碧々杵命、御子神、正天水分神、高皇產靈神、小名彦命、御子神、抑も當社は　仁明天皇承和七年十月授從五位　清和天皇貞觀元年正月二十七日授正五位　後醍醐天皇延元二年正月授正二位とあり三社作りの社殿として頗る古雅なり「吉野山舊記曰　慶長

十九年神殿、樓門拜殿等は豐臣秀頼再建す」拜殿にある三十六歌仙の額は道光親王の筆にして狩野永德の畫なり

特別保護建造物

國寶　木造天萬栲幡姫命　社殿

仝　木造玉依姫命　座像　一軀

座像　一軀

◎高算上人遺像堂址　明治維新に廢す、上人繪傳曰　後白川天皇の皇后の御惱を加持し奇特あり御感のあまり勅を賜り花供懺法を開起すと、今に至て毎年四月十一十二の両日之れを修す稱して吉野會式と云ふ因に曰此會式は他方より詣る人々大なる木の臼にて長さ凡七八尺許の杵にて餅數十石を搗きこれを細かに切りて藏王堂の前なる四本櫻の間に高き舞臺を設け其の上よりまきて參詣の人々に拾はしめ又外に諸方の信者へ配る「併諧季寄に曰吉野の餅配とは之なり此會式には京阪及び近畿より群參す

◎高城山　牛頭天王の森の東邊にあり俗に城山又は蹴鞠城と云ふ」太平記曰大塔宮の城を築き籠らせ玉ふ所とぞ」吉野勝景圖曰　佐藤忠信が虚腹を切りしも此所と云ひ傳へけるとぞ

萬葉

三芳野の高城の山に白雲はゆきはゝかりてたなひきてみゆ　釋道觀

◎金峯神社　俗に金精明神又二の鳥居とも云ふ（即ち修行門なり）祭神金山毘古神を祀す」神名帳曰金峯神社は吉野山の地主神とて金の御嶽の號も是に起るとて　文德天皇仁壽二年十一月特加從三位、又三代實錄曰　清和天皇貞觀元年正月二十七日授正三位　後醍醐天皇延元二年正月授正二位とあり

◎蹴抜塔　金峯神社の側にあり飛彈内匠の建築に係ると云ふ」義經記及吉野山名勝考曰文治年間源義經此塔の内に隱れしを敵勢追來れば是を逃れて宮瀧の方へ落行き西河へ敗走せしと（明治卅九年月月燒失）俗に義經蹴抜塔と云ふ因記此邊の地名を隱れ家と云ふ

◎青根峯「吉野八景の一、青根霽雪」吉野山名勝圖に蹴抜塔の南の上なる高山を云ふ名所なり古歌多し

新撰

吉の川岩瀬の波による花や青根が峯に消る白くも　頼政

◎飯高山安禪寺址　役行者の開基にして金峰神社の後方一丁計りに在り昔は安禪寺、寶塔院、正面堂、愛染堂、多寶塔等あり本尊金剛藏王權現にして木像なり傳に役行者の作なりといふ明治維新の際に廢す佛像は今藏王堂・寶庫に納む又擬寶珠一個殘れり其銘に慶長九年甲辰十一月豐臣秀頼再建とあり

◎苔清水　「吉野八景の一、苔清水霜葉」西行庵の傍の小川に苔清水と彫りたる標石あり其前の清水是なり「又とくしの清水とも云ふ」大和名所圖會　曰　清風花を動かして白雲生し蒼苔巖を封じては冷水滴り幽邃閑寂にして遙に塵寰を隔つ嘗て西行上人三とせの星霜をこゝに歷給ふ眞に香爐峰に結ひし樂天が草室ともいひつべし云々

山家集

とく〳〵落る岩間の苔清水くみほす程もなき住居哉　西行

泊船集曰　西行上人の草の庵の跡は奥の院より右の方二丁ばかり分け入程柴人の通ふ道のみわづかにすこしさかしき谷を隔てたるいと尊し彼とく〳〵い清水は昔に變らず見えて今もとく〳〵に雫落ける

露とく〳〵こゝろにうき世すゞかはや　はせを

◎西行庵　苔清水より一丁計り行て草庵あり上人の木像を安置す（社銘に天明五乙巳春願主江戸西鍛冶屋町天井八右衛門宅垣作者同中橋益田慶運とあり）此邊の櫻を西行櫻と云ふ花譚白なり故に上人之を愛せしとあん」

前賢故實曰　西行は佐藤憲清（一に義清に作る）鎭守府將軍秀郷九世の孫左衛門尉康清の子なり累世武を以て著る勇敢善射頗る韜畧に通ず　後鳥羽上皇に仕へて北面の武士と爲り從五位下に叙し左兵衛尉に任ず酷だ和歌を嗜む　上皇甚親遇し玉ふ然れ共榮利に薄く嘉遁の志し同族憲康と同朝を約し其家に至れば哭聲を聞く怪く之を訪ふと憲康暴死せりと是に於て意を決し出家して嵯峨に往き名を圓意と改む西行常に謂ふ桑門家なし東關西洲到らざる所なし建久九年二月十六日京都に卒す年七十三、

家集に山家集御裳濯川、宮川歌合撰集抄等あり並び世に行はる

菊地容齋の紀行に西行の苔清水の庵を記す中に「草堂わづかに三疊に爐をきりて一片の筵をしきたり上人の木像に對して坐すると通夕櫻木擔を掩へども一葉だにのこらず只枯尾花四面をめぐりて月の白くかゞやけるさま深邃筆に及ばず雲の山頭を吐呑する幽禽の時々鳴くも聞なれぬ聲なりとあり」花の吉野としては今更言を俟たず虫の吉野を愛づるこそ昔を忍ぶ感懷　入深かるべし

新古今

吉野山やかて出しと思ふ身を花ちりおはと人や待らん　西行

みよしのや花の枝折の跡とめて青葉にたとる山隠の道　村田春海

因記　吉野町の入口より茲迄の名所名蹟遊覧して凡そ一里あり朝吉野の宿を立ちゆる〳〵遊覧して夕方元の宿へ戻り翌朝出立する方よろし、貝原先生も此間の景色山にすぐれて美なる事言語に絶す山高く峰そびへて川流いときよく林木うるはして諸山ことゞく其高峻なりと大和巡覧記に賞められたり

◎大峰山　一に大仙山と稱す山上嶽迄あり金峰山中高峻を極むる高峰にして海拔六千貳百十三尺餘三面は巨巖聳峙し斷壁幾千仞白雲脚下に起り臨むもの戦慄して膽を失ふ、鐘懸嵩、涌出嵩、屏風嵩、東瞰、西瞰、蟻門渡、平等嵩等を最も難所とす山頂に到れば魏々たる梵閣あり山上藏王堂即是なり本尊金剛藏王權現及役優婆塞自作の像を安置す又古鐘あり銘に遠江國佐野郡原田莊長福寺天慶六年七月二日鑄云々とあり地勢は吉野山より南六里にあり吉野山より登るを本山と號し洞川より登るを當山又逆山と云ふ山路險絶にして實に聖寶正僧の開鑿に係ると云

◎役優婆塞行者傳　元亨釋書及西覺曼陀羅抄曰　大和國葛城郡茅原村の人にして氏を高加茂と云ひ名を小角と稱す　舒明天皇六年に出誕し少きより悟り敏く學ぶ事博くして佛道を敬し年三十二にして家を棄て葛〻山或は金峰山に居る云々

世説に云　役小角自ら草に座し母を鉢に載せて諸共に海に浮び後見るず于時　文武天皇太寶元年六月七日齢六十八歳なりしと」太寶元年より茲年明治三十九年に至て凡千二百餘年を經たり

◎大峰山上藏王堂由來　大和名所圖繪及吉野山舊記に曰　天武天皇白鳳十二年役小角金峰山を開闢せんと欲し吉野櫻本坊に寓し寺主角乘角仁等を隨從として金峰に登山し樹葉を衣とし木果を食とし苦修練行し鎮護國家の神佛を感見せんと禱る一夕山谷震動して忽ち釋迦千手彌勒の三佛互に出現す小角仰見て曰く如是の桑和の相貌何ぞ末世邪惡の人を濟度するを得んや更に懇懃に祈請す忽ち又盤石破裂して大勢忽忽の相貌を現す小角大に歡喜して曰く善哉この相貌能く國家を鎮護し萬民を濟度するに足ると乃ちこの影像を木に刻み一の小堂を建て安置す因て此所を涌出嶽と云ふ今の山上本堂是なりと小角入滅の後蓁莽漸く路を塞ぎ大蟒人を傷害す是より修行者絶

に路を絶つ　延喜帝昌泰中興開基の聖寶天詔を奉じて金峰山を再興せんと欲し小角の舊例を以て先づ櫻本坊に寄足し主寺仁勢等を率て山に入て荆棘を伐り大蟒を切る小角所建の藏王堂を再建し更に三十六箇の僧舍を構へて權現役者の香花に給仕せしむ爾來毎歳四月八日より九月十三日に至る迄山下諸寺の僧侶此坊に接宿し寶祚長久國家鎮護等を祈禱せんが爲に長日護摩供等の密法を修行し爾來今に至て退轉すること なし云々其後屢々回祿の災に罹り　後水尾天皇御宇元和二年僧快元藏王堂の朽敗せるを歎き勅許を蒙りて之を改建す當時下されし綸旨の文に曰く「大峯山上藏王堂令破壞之由候專佛法紹隆勵再興之功尤可爲神妙者也依　天氣執達如件元和二年九月十四日左少辨花押」と爾來毎年諸國有信の僧俗群參するのと幾十萬を以て數ふるに至る實に我國無双の靈區と稱すべし（現今は五月八日開扉九月貳十七日閉扉と改む）

（終）

吉野山名所（たより）

大本山 三寶院聖護院 御用達
護摩木札 調進大峰法具類販賣
名產櫻酒 吉野葛櫻菓子 製造元
大和國吉野山吉水神社前半丁上ル左側 〈中楠田本店
大和國吉野山かねの鳥居半丁上ル 〈中楠田支店

明治四十一年四月一日印刷
明治四十一年四月五日發行

定價金拾五錢
郵稅金貳錢

奈良縣吉野郡吉野村大字吉野山
發行兼印刷者　楠田良三

大阪市西區阿波座二番丁一八四番
印刷所　岡田宇一郎

吉野山吉水神社前半丁上ル
發賣所　楠田本店

吉野山かねの鳥居半丁上ル
發賣所　楠田支店

不許複製